「広島女子大学国際文化学部紀要」第10号

民国時代における五言古詩の研究

―― その成立年代を巡る論争を中心に ――

柳　川　順　子

はじめに

現代の中国人学者の間では、五言詩は東漢（後漢）後期に成立したとする説が有力である[1)]。では、この説は、いつ頃、どのような経緯を経て形成されたのだろうか。論争は、民国の1920年代後半に始まる。そして、そのわずか数年の後には、現在流布している定説の原型が既に出来上がっている。現在の定説は、時間の流れに沿って、徐々に議論が積み上げられた末の産物というよりは、むしろ、ある事件をきっかけに議論が沸騰し、その勢いの中で誕生したと言った方がより実態に近いのである。では、その事件とは何か。それは、日本人学者鈴木虎雄の論文「五言詩発生の時期に関する疑問」が、中国で漢語訳されたことである。この論文が紹介されるや、中国の学界には賛否両論が巻き起こり、結果としては、この鈴木論文を批判修正しつつ、これとほぼ同様な方向の結論に落ち着くという収束を見た。その後、幾らかの異論や修正案が提起されはしたけれども、基本的には、この民国期に形成された論が、大部分の学者の賛同を集めて現在に至っている。

ところが、民国時代におけるこうした議論の経緯は、現代の中国人学者の間ではあまり知られていないように見受けられる。たとえば、最近刊行された『両漢大文学史』（1998年７月、吉林大学出版社刊）所収の趙敏俐「文人五言詩与古詩十九首」は、従来の説に見直しを迫ろうとする意欲作だが、この民国時代の論争に言及して、鈴木論文を、幾つかの説の中の一つとして並列的に紹介するに過ぎず、しかも、その論の内容を、別の論者のそれと混同している。また、劉躍進『中古文学文献学』（1997年12月、江蘇古籍出版社刊）に至っては、鈴木論文に触発されて出てきた中国人学者の論は紹介していながら、彼らが引用し、議論の的としている鈴木論文については、ただの一言もこれに言及していない。他方、日本では、もちろん鈴木虎雄の論はよく知られているけれども、それが民国時代の中国の学者に対していかに大きな影響を与えたかということについては、案外ほとんど知られていないのではないか。してみると、中日双方の学界で忘れ去られたこの一連の出来事について、その事実の一端を記しておくことは無意味ではあるまい。

ところで、いわゆる「古詩十九首」に代表されるような五言古詩の成立時期について、私は現代の中国人学者とは違った考え方を持っている。先に挙げた趙敏俐氏も従来の説に異議を唱えているが、私の説は趙氏のそれとも異なる。私は、現代に至る歴代の中国人学者に敬意を表しつつ、彼らに向かって別の新たな仮説を差し出してみたい。それにはまず、相手の論旨をよく把握することだろう。そして、そのためには、民国時代の議論を丁寧に押さえるのが最も効果的だと考える。なぜならば、現在の定説を作り上げたのは、上述のごとく民国1920年代の論争だからである。この時代の研究に注目するのは、こうした理由からでもある。

さて、本稿ではまず第一に、考察の対象とする五言詩を、どの範囲のものとするか定義づけておきたい。第二章で、現在の中国の学界における定説を確認する。第三章は本稿の中核をなすもので、今の定説の本源である民国時代の議論について、その経緯を時間的推移に従って紹介する。第四章

では、現在の中国で行われている定説が、何を根拠として成り立っているのかを洗い出し、これに批判を加えつつ、現段階での私なりの仮説を提示する。最後に、私論の問題点を挙げて、今後の見通しを述べたい。

一

私が目下のところ究明しようとしているのは、いわゆる「古詩十九首」を代表とする、漢代無名氏による抒情的五言詩の成立時期である。先学の研究を通覧してみても、この種の古詩の出現をもって五言詩の成立と見なすものが多い。本稿も、ここに焦点を合わせて各氏の論を検討するつもりである。

さて、今ここで、「古詩十九首」に「いわゆる」という語を付したのには理由がある。すなわち、「古詩十九首」とは本来、『文選』巻二十九に収められた、十九首の古詩篇を意味するに過ぎなかったはずなのに、長年にわたってそれが作品名のように言い習わされ、この種の五言古詩を指し示すのに最も通りがよい名称として、もはや無視できないほどに流布しているからである。だが、実質的なところでは、『文選』所収の十九首を一括することにはあまり意味がない。このことについては既に論じたことがあるので、詳細は拙論「陸機擬する所の古詩について」(1999年12月、『中国文学論集』第28号) を見て欲しいのだが、要するに、数ある古詩の中でも、陸機「擬古詩」の模擬対象となった十四首は別格であって、その他の古詩篇とは一線を画する、古詩中の古典とも称すべき作品群だということである。前稿では、これを第一古詩群と称しておいた。他方「古詩十九首」とは、『文選』の撰者が、陸機の擬するところとその他の古詩と、この双方の詩群にまたがって佳作を選りすぐったものであって、そこには、古典的古詩篇も、後世これを踏襲して成った二次的古詩篇も、分け隔てなく同列に並べられている。したがって、この十九首という雑駁な詩群の成立年代を探求してみても、それほど生産的な推論は導き出せないだろう。私は、古詩中の古典たる第一古詩群について、その成立年代を明らかにしたい。

ところで、今述べた陸機擬する所の十四首について、実は私よりもはるか以前に、その特殊性に感づいていた先学がいる。清末の呉汝綸 (1840〜1903)[2] である。彼の説は『古詩鈔』という編著書の中に記されているが、この書物は、日本では見ることがきわめて難しく、前稿では許文雨『文論講疏』(1937年1月、正中書局刊) に引くところによって、その一部に言及することしかできなかった。このたび、北京大学図書館所蔵図書 (燕京大学旧蔵) の中にこの『古詩鈔』を見つけることができたのだが、改めてその全文をじっくりと読んで驚いた。そこには、私論に甚だ近似する議論が展開されていたからである。以前、許文雨の引くところを通覧した時には、許氏の論の文脈に引き込まれたためか、その近似性に気づかなかった。迂闊であった。これは必ず追補しておかねばならない。そこで、脇道へ逸れるようだけれども、呉氏の論の全文をここに紹介し、私論と共通する点、異なる点を明らかにしておきたいと思う。

『古詩鈔』という書物は、呉汝綸の門下生、賀濤 (字は松坡) によって、賀氏の故郷である河北省武強で刊行されたものである。全二十巻。呉氏によって選び出された、唐代までの五言・七言の古詩 (非近体詩)、及び金・元代までの楽府詩を収め、適宜、編者呉氏のコメントを差し挟んでいる。さて、問題の文章は、その巻一、古詩十九首の題目の下に、割注として次のように見える。

漁洋謂文選作二十首、分東城高且長・燕趙多佳人為二首。案今文選本亦皆作十九首。此拠明人張鳳翼所刻。

劉勰云、古詩佳麗、或称枚叔、其孤竹一篇、則傳毅之辞。比采而推、両漢之作乎。観其結体散文、直而不野、婉転附物、怊悵切情、実五言之冠冕也。

李善云、古詩蓋不知作者、或云枚乗、詩云駆車上東門、又云遊戯宛与洛、此則辞兼東都、非尽是乗、明矣。

汝綸聞吾友張廉卿称枚乗諸篇皆諷諫呉王毋反之恉、服其心知古人之意。因推之、十九首中大率此意、古伝枚乗之作、蓋非虚語、玉台分古詩四首不在枚乗雑詩之列、其未録之七首、蓋亦多枚詩、以非玉台体故不選耳。陸士衡所擬、今可見者十二首、鍾記室云十四首、蓋二篇亡佚矣。旧伝為枚乗作者、殆此諸篇。玉台所録枚乗雑詩九首、皆在此。惟今日良宴会・青青陵上柏・明月皎夜光三首、以非玉台体、徐陵不録、而李善拠遊戯宛与洛与駆車上東門、辨其非尽枚乗、知此三篇旧必亦云乗作。陸所擬亡二篇、其一篇必駆車上東門矣。余一篇不可復考。且詩品以此十四篇為驚心動魄一字千金、而疑去者日以疏以下四十五首為建安中曹王所製。玉台亦以凜凜歳云暮・孟冬寒気至・客従遠方来等篇、引為古詩、不云枚乗。知此十四篇与余篇古自分画、不雑厠也。玉衡指孟冬、明作於太初以前、謂為枚乗、理或可信。但任昉・鍾嶸皆謂五言起於李都尉、而韓公亦云、五言起漢時、蘇李首更号、而鍾氏并云、王楊枚馬之徒、詞賦競爽、吟詠無聞。然則断帰枚臾、蓋未可質言之也。玉台次第与文選不同、士衡又異、応従陸氏為次。

以上が呉汝綸の論の全文である。これを私なりに通釈すれば次のようになる。なお、呉氏の論旨をより明確に伝えるため、語句を補ったり、括弧付きで補足説明を加えたりした部分がある。

王士禎氏が言うには、『文選』は古詩十九首を二十首に作り、「東城高且長」詩について、その「燕趙多佳人」の句以下を分けて二首とする、と（王氏編『古詩選』巻一、古詩十九首）。案ずるに、今『文選』本もまた（『古詩選』と同様に）皆十九首としている。王説は、明人張鳳翼の刻する所（『文選纂注』十二巻）に拠ったのだろう。

劉勰は言っている。古詩は美しい作品で、あるいは前漢の枚乗の作とも言われるが、その「冉冉孤生竹」の一篇は後漢の傅毅の辞である。文辞を比較して推定するに、これらは両漢時代の作であろうか。その構成や修辞を見るに、素直でありながら粗野でなく、たおやかに対象物に密着してこれを描写し、切実な悲哀感に満ちて、実に五言詩の最高傑作である、と（『文心雕龍』明詩篇）。

李善は言っている。古詩とはたぶん作者がわからないのである。あるいは前漢の枚乗の作とも言われるが、詩に「駆車上東門」といい、また「遊戯宛与洛」といい、これらは文辞が東漢の都に言及しているから、全てが枚乗の作ではないことは明らかだ、と（『文選』巻二十九、「古詩十九首」注）。

私は、我が友の張廉卿が「枚乗の諸篇は皆、呉王に対して反乱を起こさぬようにと諷諫する趣旨をもつ」と称賛するのを聞き、彼が古人の思いをよく理解していることに感服した。そこでこのことを推し測ってみるに、十九首中の大部分は彼の言うとおりの趣旨である。昔からこれを枚乗の作と伝えているのは、恐らく虚言ではないのだろう。『玉台新詠』は、十九首中の四首（「冉冉孤生竹」「凜凜歳云暮」「孟冬寒気至」「客従遠方来」）を区別して枚乗「雑詩」の列には配置していない（詠み人知らずの「古詩」として採録）。『玉台新詠』に採られていない

七首（「今日良宴会」「青青陵上柏」「明月皎夜光」「駆車上東門」「迴車駕言邁」「生年不満百」「去者日以疎」）は、恐らくこれらもまた多くは枚乗の詩なのだが、『玉台新詠』風の詩体ではないために選ばれなかっただけだろう。さて、陸機の擬する所は、今確認できるのは十二首だが、鍾嶸は十四首と言っている（『詩品』上品、古詩）。多分その二篇は失われたのだろう。その昔枚乗作と伝えられていたものは、恐らくこれら陸機の擬する所となった諸篇ではないだろうか。『玉台新詠』に採録する枚乗の「雑詩」九首は、いずれもこの諸篇内に含まれている。ただ「今日良宴会」「青青陵上柏」「明月皎夜光」の三篇は、『玉台新詠』風の詩体ではないために徐陵はこれを採録しなかった。それから、李善は「遊戯宛与洛」（「青青陵上柏」詩の一句）や「駆車上東門」という句に依拠して、枚乗作と伝えられる古詩は、必ずしもその全てが本当に枚乗の作とは限らないことを論断していた。とすると、この三篇もまた、その昔必ずや枚乗作と言われていただろうし、陸機擬する所の失われた二篇の中、その一篇は必ずや「駆車上東門」であろうことが知られる。残りの一篇はこれ以上考究することはできない。そもそも『詩品』（上品、古詩）は、この陸機擬する所の十四首を「心を驚かし魄を動かし、一字千金のごとし」と高く評価する一方、「去者日以疏」以下の四十五首については、建安中の曹植・王粲の作ではないかと疑っていた。そして、『玉台新詠』もまた、「凜凜歳云暮」「孟冬寒気至」「客従遠方来」等の詩篇を「古詩」と題して採録し、枚乗作とは称していない。こうしたことから、この十四首とその他の詩篇とは、古は各々はっきりと棲み分けられていたことが知られる。ところで、「玉衡指孟冬」という句を含む「明月皎夜光」詩は、（李善注から導き出されるとおり）明らかに前漢太初元年（BC104）の改暦以前に作られているので、枚乗作と見なすのは、道理としてあるいは信じることができるかもしれない。ただ、任昉（『文章緣起』）や鍾嶸（『詩品』序論）は皆、五言詩は李陵に始まると考えており、韓愈もまた「五言は漢時に起こり、蘇（武）・李（陵）、首（はじ）めて号を更（あらた）む」（『昌黎先生集』巻二、「薦士」詩）と詠じている。それに鍾氏はまた「王褒・揚雄・枚乗・司馬相如といった前漢の文人たちは、辞賦の創作では盛んな勢いを見せたけれど、彼らの五言詩歌は聞こえていない」（『詩品』序論）とも述べている。だとすると、古詩十四首の作者を枚乗と断定することは、恐らく、未だ確証ある言葉として後世に残すことはできないだろう。さて、『玉台新詠』における作品配列は『文選』とは同じでなく、更に陸機の「擬古詩」における並べ方もまた異なっている。陸機「擬古詩」の配列に従うべきである。

以上が『古詩鈔』に記された呉汝綸の論であったが、彼独自の見方は、「汝綸聞」から始まる第四段落に述べられている。その論述を吟味するに、彼が究明しようとしているのは次の二点である。第一に、枚乗作と伝えられた古詩は、いずれの詩篇がこれに該当するのか。第二に、古詩の作者として枚乗を充てることは妥当かどうか。彼は、枚乗作と断定することにはなおも慎重でありながら、それでも枚乗の名にかなり執着しているように見受けられる。今現在の共通認識としては、枚乗の生きた前漢初め、古詩のように洗練された五言詩が生まれ得たはずはないとされているから、この呉氏の説は、あるいは甚だ時代遅れと感じられるかもしれない。実際、現在の定説が出来上がった民国時代以降、論者の間で呉汝綸の説はほとんど等閑視されている感があるし[3]、たとえ言及されたとしても、古詩の作者が現実に枚乗であり得るか、という観点から手厳しく論難されるのがせいぜいのところであった[4]。

だが、私が注目したいのはもっと別な点にある。すなわち、枚乗作と伝えられる古詩篇は、陸機

擬する所の十四首と一致するのではないかという推定、そして、この十四首とその他の古詩篇とは、その昔は截然と区別されていたという指摘である。この二点において、呉氏の論と私論とは全く重なり合う。しかも、考察のための資料も、私論と同様に、『詩品』上品、古詩の項の記述、及び『玉台新詠』における古詩採録のあり方という二つを中心としており、その推論の進め方も、基本的にはかなり近似している。呉氏は恐らく、現在「古詩」と総称されている作品群について、これを二つのグループに弁別し得ることにほとんど気づいていたのではないだろうか。ただ、枚乗という名にこだわるかどうかという一点で、呉氏の論と私論とは異なっている。彼の論は、どちらかというと枚乗作説を論証しようとする方向へ傾いているように感じられる。私は、古詩の作者が実際に枚乗であったかどうかという点は今のところ解明のしようがないように思うが、枚乗作と伝えられた古詩群を手がかりに、五言古詩という謎の多い作品群について、その成立の時期や経緯を探る糸口は求め得ると考える。だが、そうしたニュアンスの違いはあっても、私の論が呉氏の論とかなりの部分重なることは確かだ。ここに呉氏の所論を明記し、百年余り前に為されたこの先行研究に対して、衷心より敬意を表したい。

二

現在の中国の学界では、五言古詩の成立時期を、東漢後期と推定するのが一般的である、と私は最初に述べた。だが、本当にそう言い切ってよいだろうか。ここで、今一度その当否を確認しておきたい。

さて、先にも言及した劉躍進『中古文学文献学』は、中国における中古文学研究の現状を概略知る上で便利な工具書であるが、「古詩十九首」の成立時期に関する問題について、「現代の学者は、基本的にはこの一群の詩を東漢後期の作品と推定していると言ってよいだろう」とまとめている。確かに劉氏の言うとおり、中華人民共和国成立前後からこのかた数十年、文学史の常識としては、おおむね五言古詩の成立は東漢後期とされているようである。

たとえば、游国恩等主編『中国文学史』(1963年7月、人民文学出版社刊)は、発刊以来今日に至るまで、実に二十一回もの版を重ねた古典的ベストセラーだが、多くの学生や研究者に多大な影響を与えてきたであろうこの書物は、現代の最大公約数的認識を次のように示す。

> 我々の見るところ、「古詩十九首」は、一人の人間が作ったものではないが、ただ風格や内容は大体似通っている。その成立年代は、前後にそれほどかけ離れてはいないはずだ。更に、文人による五言詩制作の始まりと発展、及び古詩に関係する歴史事実から総合的に判断して、「古詩十九首」の成立年代は東漢後期の数十年間、すなわち上限で順帝の末年、下限で献帝以前(西暦で約140〜190年)は出ないだろう。

ここに示された、十九首の成立は時間的にそれほど拡散しないという見方は、後述する梁啓超『中国之美文及其歴史』が、「古詩十九首」の成立年代を確定するための前提として設けた仮定条件である。総じて、游国恩等編『中国文学史』は、民国時代の議論の成果を集約するもののように看取される。

学生向けの概説書としては最新の部類に属する、袁行霈主編『中国文学史』(1999年8月、高等教育出版社刊)も、基本的には游氏等のそれと同様な説をとる。李炳海氏の執筆になる第二編、第

七章「東漢文人詩」に次のような推論が見える。

> 「古詩十九首」は、ある一時期一地方で作られたものではなく、その作者もまた一人ではなく複数である。十九首の内、かなりの詩篇は、その詩的境地や用語といった面で、秦嘉の「贈婦詩」と似通ったところが多いので、両者の成立年代はそれほどかけ離れてはいないはずだ。とすると、「古詩十九首」の出現は、最も遅くて桓帝期（146〜167）を下ることはないだろう。

李炳海氏には「《古詩十九首》写作年代考」（『東北師大学報』哲学社会科学版、1987年第1期）という論考があり、今ここに十九首の成立を東漢桓帝期以前と絞り込んでいるのは、その李氏自らの研究成果に拠る。古詩の成立年代を、作者名の明らかな作品と付き合わせることによって割り出そうとする手法には大いに共鳴するが、ただ、両者間の文辞の類似性をどう解釈するかという点では、私は別の考え方を持っている。このことについては、後ほど章を改めて論じたい。いずれにせよ、李炳海氏もまた、五言古詩の成立を東漢後期と見なす定説の大枠は外れていない。

それでは、漢代五言古詩についての専門書ではどうだろうか。

馬茂元『古詩十九首探索』（1957年6月、作家出版社刊）[5] は、十九首の成立年代を東漢末期と推定し、その根拠として、この時期に至らないとこのように成熟した五言詩は生まれるはずがないと述べる。また、近年発表された鄭文『漢詩研究』（1994年12月、甘粛民族出版社刊）も、やはり五言詩の成熟期を東漢後期と見なし、その根拠として、幾篇かの古詩に東漢時代の事物が描かれていることを挙げる。馬・鄭両氏の論はいずれとも、結論・根拠ともに民国時代の議論を踏襲するものである。

さて、1945年8月にその草稿が成った逯欽立「漢詩別録」[6] は、考源第二の部で、両漢時代の詩歌・文章から五言を為す句を丹念に拾い上げ、これを根拠に、五言詩の成立は東漢章帝期（75〜88）を起点とする、と結論付ける。他方、辨偽第一の部では、「古詩十九首」の多くを桓帝・霊帝期の産物と認める一方、「明月皎夜光」詩については、これを新王莽期の作であろうと推定する。この詩の季節描写が、王莽の採用した暦法に合致するというのが、その推定の根拠である。逯欽立氏は、五言詩の成立を東漢章帝期と断言する点で、現代の他の多くの論者とは異なっている。しかし、前章でも述べたとおり、本稿で比較検討しようとしているのは、各論者が、いわゆる「古詩十九首」に代表されるような五言古詩について、その成立時期をどのように推定しているかという点である。この観点から見れば、逯氏もまた、東漢後期成立説をとるということになるだろう。

他方、序文でも言及した『両漢大文学史』所収の趙敏俐「文人五言詩与古詩十九首」は、現時点での学界の共通認識が東漢後期成立説であることを認め、この定説に至る研究史を概略紹介した上で、次のような異論を提起する。すなわち、文人による五言詩は、西漢（前漢）時代に起こり、東漢に至って成熟の段階に入った。漢代文人五言詩の最高傑作「古詩十九首」は、その大部分が東漢初年から東漢中期までの産物である、と。趙氏のこの結論は、次のような二つの考察をその前提に置いている。まず第一に、文人による五言詩というものを、著名な文人による署名つきの作品ばかりに限定せず、もっと広い意味で捉える必要があるということ。第二に、従来の論者がしばしば言及してきた東漢の班固（32〜92）の「詠史詩」は、漢代文人五言詩の代表作とは言い難く、むしろ、班固という保守的文人が、新興文学ジャンルである五言抒情詩に影響されて作った、五言詩史から言えば氷山の一角とも言うべき作品なのだから、この詩の質朴さをもって当時の文人五言詩の水準を推測することはできない、ということである。趙氏の結論は、現在の定説には繋がらなかった、

民国時代の他の一派に左袒しようとするもののように看取されるが、未だ現行の定説を塗り替えるには至っていないようである。

以上を要するに、現代の中国の学界では、五言詩の成立を東漢後期と見る説が圧倒的に優勢だと見てよい。では、この定説は、いつ頃から、どのような議論を経て出来上がったものなのだろうか。次章では、この五言詩成立年代を巡る論争の経緯を辿りたい。

三

五言詩の成立年代を巡る論争は、民国の1920年代半ば、鈴木虎雄の論文「五言詩発生の時期に関する疑問」が翻訳・紹介されたことに始まる。まず、その論旨を提示しよう。

> 一般に五言詩は、前漢景帝・武帝期（BC157～BC87）の枚乗・李陵・蘇武らの作品に始まるとされるが、この説は信じがたい。その理由は三つある。第一に、これらの作品を五言詩の始めとする説は六朝梁代に始まるが、その説の出所が明らかでないこと。第二に、五言詩発達の経路が不明なこと。もし前漢時代、既に枚乗・蘇武らの五言詩が存在していたのだとしたら、同時期の五言の歌辞と照らしてみて、それはあまりにも突発的な事象である。また、後漢中葉までの二百余年の間、彼らに続く五言詩作家の見えないことも不可解である。第三に、枚乗・李陵らの五言詩制作について、歴史書には何の記述も見えないこと。さらに疑問を広げれば、前漢の作と伝えられる五言詩のほとんどは疑うべきものとなる。要するに、完備した五言詩が前漢の初期において既に存在したとは非常に疑わしい。五言詩は、「詠史詩」を作った班固や「冉冉孤生竹」の作者とされる傅毅らが現れた、後漢章帝・和帝の頃（75～105）に成立し、その後に隆盛期を迎えたというのが実態ではないかと考える。

日本において、この鈴木論文が初めて発表されたのは、1919年4月（『史林』、史学会講演）のことであったが、この当時の中国では、五言詩の起源について特に問題視はされていなかったようである。たとえば、黄侃「詩品講疏」[7]は、鈴木氏が考察に取り上げた枚乗・李陵・蘇武・班婕妤等の五言詩制作について、基本的にはその真偽を疑っていない。そして、古詩「明月皎夜光」「凜凜歳云暮」の二首を、その季節描写から前漢太初改暦以前の詩と判断し、それから、五言の作は、前漢時代においては楽府歌謡に多く認められるとして、具体的な作品名を列挙する。

ただ、鈴木論文が中国にもたらされる直前、実は中国においても、これに拮抗するような論が登場していた。徐中舒「古詩十九首考」（1925年6月、『立達季刊』[8]）である。彼は、「古詩十九首」の一篇一篇について、その詩の内容に合致する歴史的事実、及びその詩語の用例を漢魏六朝の諸文献から探し出し、また、その古詩篇を踏まえたと見られる後人の作品を指摘して、その結果、十九首の全てを東漢以降に作られものと推定している。その論法の一端を例示すれば、たとえば「明月皎夜光」詩について。彼はまず、この詩に見える、こおろぎを意味する「促織」という語が、『爾雅』『詩経毛伝』『方言』などの西漢以前の書物には見えない一方、『春秋考異郵』『春秋説題辞』『詩緯汜歴枢』といった緯書には見えることを指摘する。そうした上で、緯書の多くは東漢末年に成ったと言い、またこの語が通称として用いられるようになるのは東晋以後であることを示して、この促織という語を含む「明月皎夜光」詩の成立を、最も早くて東漢末年と推定する。私見を差し挟めば、促織という語が緯書に頻見するという指摘は大変示唆に富むものだが、しかし緯書は、東

漢末年よりもずっと早い時期、前漢末から後漢初めにかけて盛んに行われたのではなかったか。こうした武断が、徐氏の論文にはやや目立つ。とはいえ、その博引旁証の論は、後に多くの論者が引用・言及することとなった。

さて、この徐中舒論文が発表されて一年後の1926年５月、先に挙げた鈴木論文が中国の学界に紹介される。陳延傑訳「五言詩発生時期之疑問」(『小説月報』第17巻第５号）である[9]。この論文の翻訳・紹介は、中国の学者たちに大きな衝撃を与え、そのわずか五ヵ月後には、早くも次のような反論者が名乗りをあげている。

朱偰「五言詩起原問題」(1926年10月、『東方雑誌』第23巻第20号）が、その最初の反論である。朱氏は、五言詩東漢成立説を唱える鈴木論文に対して、その三つの論拠に逐一反駁を加えている。まず第一に、五言詩の本源は、詩そのものの内部に示されているとし、先ほどの黄侃氏と同様に、前漢初期の作であることを明示する作品として「明月皎夜光」「凜凜歳云暮」の二首を挙げる。第二に、五言詩発達の経路は、漢の統一以前から後漢末に至るまで脈々と連なっているとし、『楚漢春秋』に引く虞美人の歌[10]などの史料を挙げる。そして、詩歌の歴史は、必ずしも拙僕な俗謡・民歌から「古詩十九首」のような華やかな言語芸術へ、雑言から整然たる五言詩へと発展するとは限らず、両者が同時平行して存在することも多々あるのだということ、また、五言詩史における後漢中葉までの二百年間の空白は、作者名が残らなかったり、多くの作品が滅びたりしたためなのだということを論ずる。第三に、史伝に新文学の始まりが記されねばならぬ必然性はなく、五言詩に関する記述が歴史書に見えないことは怪しむに足りないとする。要するに、五言詩は楚漢紛争時期に起こり、枚乗や李陵らの生きた景帝・武帝期に完成、その後漸次発達し、魏に至って最盛期を迎える、というのが朱氏の結論である。

鈴木論文に対するこの朱氏の反論は、引き続き更なる反論を呼び起こした。1927年９月、朱氏の論と同じ『東方雑誌』(第24巻第18号）に発表された、徐中舒「五言詩発生時期的討論」がそれである。先ほども言及した、「古詩十九首考」の著者であるあの徐氏である。彼はまず、朱偰氏が「明月皎夜光」詩を西漢初期の作品とすることに対して、既に「古詩十九首考」で論じたとおり（本稿にても前述のとおり)、と一蹴し、更に、朱氏の挙げた虞美人の歌については、これを引く『楚漢春秋』は偽書であり、しかもこの五言の詩歌は、六朝末の文学評論文の類にも言及されていないから信ずるに足りない、と切り捨てる。他方、鈴木論文に対しては、結論には賛同しながらも、その根拠には同調しないという姿勢を見せる。徐氏は、班固の「詠史詩」や傅毅の作と伝えられる「冉冉孤生竹」を偽作と判断した上で、この二篇の詩を根拠に五言詩の成立年代を推定した鈴木説は、たまたまその結論が的に当たっただけだ、と言う。そして、鈴木論文には言及されていなかった、章帝・和帝期の五言詩資料を新たに幾つか挙げた上で、なおそれらの文学史的意義は低いとし、五言詩の成立は建安年間である、という新説を打ち出す。この徐中舒論文は、「古詩十九首」以外の漢代五言詩について、軒並みこれを後人の偽作と断定しており、先の「古詩十九首考」に比べると、その懐疑熱がいよいよヒートアップしているような印象を受ける。想像するに、それは、日本人学者が自説と同様な論を打ち出してきたことに刺激され、これに対して過度の対抗意識を燃やしてしまった結果ではなかっただろうか。

こうした趨勢に対して、その行き過ぎを厳しく難ずる論者も現れた。1928年７月刊行の古直『漢詩研究』(上海、啓智書局）である。古氏は、その巻四の「古詩十九首辨証余録」と題する文章に、近年の五言詩成立年代を巡る論争を取り上げ、鈴木虎雄・徐中舒両氏の説を激しい調子で批判している。その論拠として、まず第一に、西漢時代、無名氏による五言詩はかなり多いこと、第二に、

もし古詩のあるものが建安時代に成ったとすれば、『詩品』に「人も代も冥滅す」などと言うはずがないということ、第三に、もし徐氏の言うように古詩の大部分が建安時代の産物であるならば、これを模擬した西晋の陸機がその作者を知らないはずはなく、よって「古詩に擬す」などと称するはずがないということ、の三点を挙げる。古直氏自身は、六朝時代の劉勰や鍾嶸以来の見方を襲って、「古詩十九首」を両漢時代の作と見る。

ところで、この半年後の1929年１月、先にも挙げた徐中舒氏の「古詩十九首考」が、『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』第６集第65期に再び掲載されている。その論文の末尾に附せられた編集者の後記によると、某君の『古詩十九首之研究』という単行本が上海の光華書局から出版されたが[11]、それはこの徐中舒論文を引き写して成ったもので、しかもその趣旨を多く歪めているため、特にここに重印するのだという。徐氏論文の再刊行には、こうした事情があったらしい。このことは、ある一面、徐中舒氏の論がそれだけ広く流布していたことを物語るかもしれない。他方、徐氏に論難された朱偰氏は、同1929年、「再論五言詩的起原」(『天津益世報学術週刊』４月15・22日)という論文を発表したらしい[12]（未見)。いずれにせよ、この間、五言詩の成立年代を巡って、引き続き盛んに論争が行われていたことは十分想像される。この年の10月、既に陳延傑訳のある鈴木論文が、再び別の翻訳者によって紹介されたのも（『語絲』第５巻第32期所収、汪馥泉訳「五言詩発生時期之疑問」)[13]、こうした気運に乗るものであったかもしれない。

1930年代に入ると、論争は次第に収束の方向へと向かい始める。1930年に発表された羅根沢「五言詩起源説評録」(『河南大学文学院季刊』第１期)[14]には、これまでの議論を振り返り、これらを整理・統括しようとする意図が感じられる。羅氏は、枚乗・李陵・蘇武の詩を疑問視した鈴木論文の卓見を評価し、五言詩の始まりを楚漢抗争期と見る朱偰の論に対しては、先にも紹介した徐中舒「古詩十九首考」を以てこれを否定し、五言詩の成立を建安時代と見る徐中舒「五言詩発生時期的討論」に対しては、建安は五言詩の成立期というよりも最盛期と呼ぶのが適当ではないか、と建議し、黄侃「詩品講疏」に挙げられた五言の詩歌については、その多くが西漢時代の作とは断定できないものであり、それらを以て五言詩が西漢初めに存在したことを論証することはできない、と批判する。また、こうした論評に加えて、梁啓超『中国之美文及其歴史』をその上梓に先駆けて紹介し、五言詩の成立を建安七子の時代からさほど遠くない東漢中葉と見るその説を引用する。そうした上で、羅根沢氏自身の見解として、五言詩の起源は、少なからぬ五言歌謡が誕生した西漢末成帝期にあり、文人による五言詩は、東漢の章帝・和帝期に始まり、続く桓帝・霊帝期に完成、漢魏の際にその全盛期を迎える、という総括を示す。なお、いわゆる「古詩十九首」の成立年代については、この論文から羅氏の見方を窺い知ることはできない。ただ、後年書かれた「『古詩十九首』之作者及年代」(『読書通訊』1941年第31期）には、徐中舒「古詩十九首考」や梁啓超の論に同調して、その成立を東漢末年と推定する論が見える。

羅氏論文と同じ時期に出た張長弓（張聡致)「五言詩起源問題叢説」(『晨星月刊』第１期）も、五言詩の起源の問題について、歴代の説を総括しながら論じようとしたものだが、ただ、近年の論者では、古直・鈴木虎雄の二人を取り上げるに過ぎない。張氏は、その結論として、五言詩の起源は漢代初期の無名詩人にあり、現在伝わる古詩は、それが建安年間に潤色されたものであろう、と推測する。

さて、1931年７月に出版された陸侃如・馮沅君『中国詩史』(上海、大江書鋪）は、中巻の第一篇第二章「五言詩的起源」で比較的詳細にこの問題を論じているが、著者も明記しているとおり、五言古詩の成立年代を推定する上で、論の多くを徐中舒氏の成果に依っている。この巻は、翌年７

月に再版が、更にその翌年の8月には三版が出ており、後には上海商務印書館からも再度刊行されている。いかに多くの読者を惹きつけたかが窺われるが、その本の流布とともに、徐中舒氏の論もまた、広く読書人の間に浸透していったのではないだろうか。実際、これ以降「古詩十九首」に言及する論者は、その成立年代を東漢末とするものが大多数を占めるようになる。

1935年9月に発表された胡懐琛「古詩十九首志疑」(『学術世界』第1巻、第4期) も、そうした論文の一つである。胡氏は、「古詩十九首」を漢魏の間に成ったものとし、幾つかの根拠を札記形式で挙げるが、その論法は多く徐中舒氏のそれを襲うもののように看取される。

先に言及した梁啓超『中国之美文及其歴史』が、単行本として初めて刊行されたのも[15]この頃である (1936年3月、上海、中華書局刊)。この論著の執筆時期は未詳だが、ただ、先ほどの羅根沢「五言詩起源説評録」に「我が師梁任公先生には『美文史』という書物があるが、未だ上梓されないうちに、にわかに亡くなってしまわれた」と記していること、この書物の体裁が未完成のままの状態であること、門人葛天民氏による追補「全漢詩種類篇数及其作者年代真偽表」が、梁啓超逝去の翌年、1930年夏に完成していることなどから考えて、恐らくはその最晩年、1928年頃に書かれたと推定される[16]。想像するに、梁氏もまた、五言詩の成立年代を巡る一連の論争を興味深く眺め、この問題に対して一家言を持つようになっていたのではないだろうか。彼は、「古詩十九首」を代表とする五言古詩について、これら一群の作品を同時代の産物と仮定した上で、その成立年代をおよそ西暦120年から170年までの約50年間、すなわち建安期に隣接する東漢中葉と推定している。その判断は、五言古詩の作風が、西漢時代の他の作品には似ず、却って東漢末期や建安文壇の詩人たちの風格に近い、という直覚的鑑別によるという。そして更に、もし「古詩十九首」が東漢中葉の作だとすれば、それはまさしく、これから混沌の時代が始まろうとしている不安な社会状況の下で生まれた作品だということであって、それ故にこの作品群には厭世的な色彩が濃厚なのだ、と論じている。こうした発想は、現代の論者の間に今もなお脈々と受け継がれているように感じられる。

さて、同じ頃、「古詩十九首」研究の集大成的専門書も現れている。1936年6月に出版された隋樹森『古詩十九首集釈』(上海、中華書局) である。本書は、「古詩十九首」に関する従来の評論・注釈を網羅的に収集したものであるが、その巻一は、五言古詩の成立年代についての考証に充てられている。隋氏は、「古詩十九首」の全てを東漢時代の産物とする近来の説について、その主たる論拠を六つ挙げ、これに対して一つ一つ反証した上で、この古詩群は、やはり両漢時代の無名氏による作品と結論付けるのが妥当だとしている。隋氏のこの論は、漢代の五言詩を片っ端から疑い、その制作年代を軒並み東漢末にまで引き下げようとする最近の趨勢に対して、一歩引いた視点から、比較的冷静な態度でこれを疑問視したものであるが、見るところ、中華人民共和国成立後の論者には、この隋氏の疑義はそれほど真摯に受け止められていない。

以上、民国時代に繰り広げられた五言詩成立年代を巡る一連の論争について、私なりにその経緯の一部始終を辿ってみた。清朝までは専ら鑑賞の対象として捉えられていた感のある「古詩十九首」は、この民国時代、初めて文学史研究の見地から客観的な検討を加えられるようになったが、これには、日本人学者鈴木虎雄の投じた一石が大きく与っていたと言っても過言ではないだろう。また、現在の中国における定説はほとんどこの時期に完成しており、その形成は多く徐中舒論文の牽引するところであったということも明らかになったと思う。

四

現在の定説は、五言古詩の成立を東漢後期とする。それでは、この定説は、煎じ詰めたところ何を根拠として成り立っているのだろうか。私の見るところ、それは次の二つに集約されると思う。一つは、ある幾篇かの古詩に、東漢時代の事物が描かれているということ。もう一つは、古詩の詩語や発想が、後漢末の文人による作品に頻見するということである。本章では、この二つの論拠に対して反証を挙げ、定説の絶対的ではないことを示したいと思う。なお、ここに挙げる反証は、既に前稿において指摘したことと多く重なる。今再びここに記すのは、その資料の持つ意義を改めて明確に示すためである。

さて、まず第一の根拠について。従来の論者の多くは、ある一部の古詩に東漢時代特有の事物が描かれていることを指摘し、これをもって全ての古詩を東漢時代の作と見なしている。だが、全ての古詩が皆、東漢時代の事物ばかりを描くわけではない。もし彼等の論法に倣って、作品に描かれた事物からその成立年代を推定するというのであれば、古詩の中には西漢時代の作と考えてもおかしくないものは少なくないのである。たとえば、牽牛・織女の悲恋を描く「迢迢牽牛星」詩である。このいわゆる七夕伝説は、確かに徐中舒「古詩十九首考」も指摘するとおり、現存する文献資料の上では、西晋時代以降にしか登場しない。だが、少なくとも口承の伝説としては、それ以前から夙に存在していたと考えられるのであって、後漢時代の画像石に、この二人の姿を認めることができる[17]。墓室の装飾に描かれるということは、後漢当時、その物語が既に広く普及していたことを意味するだろう。更に遡って西漢時代、宮殿の御苑の一角には、二人の石像が池に隔てられて立っていたらしい。西漢の都を活写した班固「西都賦」に、上林苑の様子を描いて「集乎豫章之宇、臨乎昆明之池、左牽牛而右織女、似雲漢之無涯」(『文選』巻一) というのがそれである[18]。班固は、曽祖父の班況以来、多くの学才あふれる人材を宮廷に送り込んだ家柄の出身で、前漢末、成帝の寵愛を受けたかの班婕妤は、その大伯母にあたるという血筋である。したがって、彼の描く長安の様子は、文献から得た知識に拠るのみならず、その父班彪を通じて、詳細にわたって問わず語りに聞かされていたものでもあったのではないだろうか。「西都賦」に見える描写は、決して想像上の産物ではないだろう。また必ずしも、その豪奢を非難せんがための虚言でもないだろう。その作品に、上林苑の昆明池の両岸にたたずむ男女一体ずつの石像が描かれているのである。上林苑といえば、宮廷音楽を掌った楽府の所在地でもあるが、そうした場所に、雲漢に隔てられた牽牛・織女を具現化する石像が立っていたということは、西漢時代、宮廷内の宴の場などで、こうした悲恋物語が楽しまれていたことを想像させる。そして、これと同じ牽牛・織女を描く「迢迢牽牛星」詩は、こうした前漢宮廷文化の只中で作られ、詠じられていたものとも十分考え得るのである。

ところで、この第一の根拠は、いわゆる「古詩十九首」を代表とする古詩篇が、一つのまとまりを為す作品群としてほぼ同時代に成立したということを暗黙の了解としている。だが、本稿第一章でも述べたとおり、私は、陸機擬する所の十四首を第一古詩群と名づけ、これを古詩中の古典的存在と想定する一方、これに属さない詩篇の中には、後人による偽作も相当数含まれていると推測する。先人の言う、明らかに東漢末の空気を映し出す作品、たとえば「去者日以疎」などは、この第一古詩群から外れる作品であって、したがって、その成立年代がかなり下るだろうという先人の指摘にはほとんど異論はない。他方、ただ今取り上げた「迢迢牽牛星」は第一古詩群に属する詩である。もし私の仮説が妥当であるならば、双方、その描く世界が隔たっているのは当然のことだろう。私は、第一古詩群とその他の詩篇とは明瞭に区分けし、それぞれ別個にその時代背景を探った方が

生産的だと考える。

さて、古詩の成立年代を東漢後期とする根拠の第二は、古詩に類似する表現が東漢末の文人の作品に頻見するということであった。だが、古詩に基づく表現であれば、後漢後期よりも更に上代へ遡った時代の作品に、確かにそれと認められるものがある。それは、後漢の明帝・章帝期（57〜88)、かの班固と並称された傅毅の「舞賦」(『文選』巻十七）である。この作品に見える「哀蟋蟀之局促」という句は、古詩「東城高且長」にいう「蟋蟀傷局促」を確実に踏まえる。なぜそう言えるのか。まず、「舞賦」にいう蟋蟀とは、こおろぎという虫を意味する以上に、『詩経』唐風の中の一篇を指すだろう。なぜならば、この句と対をなす「嘉関雎之不淫兮」が、言うまでもなく『詩経』周南、関雎、及びその小序にいう「関雎、楽得淑女、以配君子、憂在進賢、不淫其色、哀窈窕、思賢才、而無傷善之心焉」を踏まえるからである。ただ、「蟋蟀」が『詩経』の篇名だとしても、その「蟋蟀」の詩には、「局促」という形容詞はどこにも見当たらない。ところが、古詩「東城高且長」には「蟋蟀は局促なるを傷む」とあり、ここにいう「蟋蟀」もまた『詩経』の中の一篇を指す。だとすると、傅毅「舞賦」において「蟋蟀」が「局促」と形容されたのは、この古詩の一句を踏まえたからに他ならないだろう。だが、本当にそう言えるだろうか。逆に、古詩「東城高且長」の方が傅毅「舞賦」を踏まえたという可能性はないだろうか。あるいは、古詩と「舞賦」との双方に影響を与えた幻の古典的テキストがあったという仮説は成り立たないだろうか。こうした疑問の余地がないわけではないが、しかし、私は、そのような可能性はきわめて低いと考える。なぜならば、古詩「東城高且長」にいう「蟋蟀傷局促」は、「晨風懐苦心」という句と対を為し、この「晨風」とは、『詩経』秦風の中の一篇「晨風」を指すからである。片や『詩経』のみを踏まえ、片や『詩経』に加えて傅毅「舞賦」をも踏まえるというのでは、対句としてあまりにもバランスが悪すぎる。また、今ひとつの理由として、この傅毅「舞賦」には、別の部分に「夫何皎皎之閑夜兮、明月爛以施光」という句が見え、これもまた明らかに古詩を踏まえているからである（「明月何皎皎」の冒頭句)。そもそも傅毅「舞賦」という一篇の署名付きの作品が、同じ古詩というジャンルの別々の作品にそれぞれ影響を与えるとは考えにくい。傅毅「舞賦」は、複数の古詩篇に表現発想の素材を提供するほど規範的な作品ではないだろう。また、「舞賦」と二篇の古詩と、その双方に影響を与えた第三の古典的テキストを想定することにも無理がある。それよりも、宴席で催される美女たちの舞踊の艶麗さを描くために、古詩という、恐らくはある独特のニュアンスを湛えた一群の作品の中から、複数箇所、典故表現の素材が引き抜かれたと考える方がはるかに自然である。以上のような理由から、傅毅「舞賦」には、古詩の影響が明らかに認められると私は判断する。なお、傅毅の踏まえた「東城高且長」「明月何皎皎」はいずれとも、先ほど述べた第一古詩群に属する詩篇である。

それでは、傅毅「舞賦」に影響を与えた古詩篇は、いったいいつ頃成立したと考えるのが妥当だろうか。従来の論者の間では、類似した表現を持つ作品は、おおむねほぼ同時代の産物として解釈されてきたように思う。だが私は、用いられた古詩が、その時点で既に誰もが知る古典的存在となっているのでなければ、こうした表現は成り立たないと考える。古詩を用いたこと、それによって、作品の醸し出す世界が深みを増したことが、読者に感受されないようでは意味がないからである。そして、ある作品がそのような古典的作品として位置付けられるようになるためには、ある一定の時間と、特別な格付けが必要なのだと思う。とすると、その成立年代は思いのほか早いと考えねばならない。傅毅の用いた古詩篇は、遅くとも後漢初め、光武帝期（25〜57）には既に存在していたのではないだろうか。

おわりに

現行の定説では、五言古詩の成立は東漢後期とされている。しかし、この定説の根拠となる考え方を洗い出してみると、それは必ずしも唯一絶対のものではないことがわかる。私は、従来漠然と一括されてきた五言古詩を、第一古詩群とその他の詩篇とに分けた上で、この前者のグループに属する詩篇は、遅くとも後漢初めには既に成立していたと考える。ただ、もしそうだとすると、この時期、文人による五言詩制作がひどく低調なのはどうしたわけだろう。また、第一古詩群に属する詩篇が全て出揃い、これが一つのまとまりを為して流布するようになるのは、いつ頃、どのような場においてなのだろうか。こうした問題については、稿を改めて論じたい。

注

1）日本においても、五言詩の成立を東漢後期と見る見方が優勢である。ただ、それ一辺倒というわけではない。たとえば、吉川幸次郎はその「推移の悲哀－古詩十九首の主題－（下）」（1961年4月、『中国文学報』第14冊）の中で、「十九の詩のすべてが後漢時代の作であるとする近ごろの学者の見解に、私はにわかに同調しがたいものを感ずる」と述べる。鈴木修次『漢魏詩の研究』（1967年、大修館書店刊）は、五言詩が成立した年代よりも、それが流行した時期の方へ論点をずらした方が生産的であるとの視角を提起し、その流行の時期を後漢末と推定する。岡村繁「五言詩の文学的定着の過程」（1971年、『九州中国学会報』第17巻）は、前漢末から後漢にかけての上層階級における俗楽・歌謠愛好の風潮を指摘し、「古詩十九首」が作られ広まったのも、こうした軽佻な貴族的雰囲気の中においてではなかったかと推測する。

2）呉汝綸、字は摯甫、安徽省桐城の人、清末同治年間（1862～1874）の進士。『清史稿』巻四八六、文苑伝三にその事跡が記されている。贅言ながら、彼は晩年、学制を視察するために日本を訪れており、この時の記録として『東游叢録』四巻を著している。

3）実は、本稿第三章でも取り上げる隋樹森『古詩十九首集釈』は、その巻四、評論の部に、呉汝綸の論の最も重要な部分「陸士衡所擬今可見者十二首」以下を引く。ただ、この隋氏自身をも含めて、五言詩の成立時期を論ずる学者の間では、呉氏の論はほとんど取り上げられていない。

4）たとえば、本稿第二章でも言及する鄭文『漢詩研究』は、「論所謂枚乗詩」と題する一章の中で、呉汝綸の説を論破の対象の一つに取り上げている。

5）1981年、書名を『古詩十九首初探』と改めて修訂・再版（陝西人民出版社刊）。

6）逯欽立遺著・呉雲整理『漢魏六朝文学論集』（1984年11月、陝西人民出版社刊）所収。

7）黄侃「詩品講疏」は未完の稿本。その『文心雕龍札記』明詩篇に引く。本札記は、1914年から1919年にかけて、北京大学における教学のために執筆された。「詩品講疏」の公刊は、范文瀾『文心雕龍講疏』（1925年10月、天津、新懋印書局）に引用するのが最も早い。范氏は、黄侃が『文心雕龍』を講じていた当時の門下生である。

8）『国立中山大学語言歴史学研究所週刊』第6集第65期に再掲載された徐中舒「古詩十九首考」附、編集者後記に拠る。

9）陳延傑による鈴木論文の翻訳は、恐らく、その前年1925年11月に刊行された『支那文学研究』（京都、弘文堂書房）所収のものに拠ったのだろう。

10）この史料の持つ意義は、すでに宋の王応麟が『困学紀聞』巻十二、考史において指摘している。

11) 北京図書館編『民国時期総書目』(1985年、書目文献出版社刊) によると、1927年、賀揚靈『古詩十九首研究』が上海の光華書局から刊行されている。未見。
12) 国立北平図書館索引組劉修業編『文学論文索引続編』(1933年11月、中華図書館協会刊) に拠る。
13)『民国時期総書目』によれば、汪馥泉氏はその後、鈴木虎雄『支那文学論集』を全訳している(1930年5月、上海、神州国光社刊『中国文学論集』)。
14)『羅根沢古典文学論文集』(1985年7月、上海古籍出版社刊) 所収に拠る。下文の「『古詩十九首』之作者及年代」も同様。
15) 刊行自体は、1932年、中華書局刊『飲冰室合集』(専集) 所収のものが最初である。
16) 李国俊編『梁啓超著述繫年』(1986年1月、復旦大学出版社) は、この論著を1924年の位置に置く。ただ、明確な根拠は示されていない。
17) 小南一郎『中国の神話と物語り』(1984年2月、岩波書店刊) を参照。
18) 出石誠彦『支那神話伝説の研究』(1843年11月、中央公論社刊) に既に指摘する。

(2001年10月5日受理)

抄録

有关民国时代对五言诗成立时期论争之研究

柳　川　順　子

当今多数的学者们，都认为五言古诗是成立於东汉后期。此定论源自民国时代的论争。这次论争发生在1920年代中期，是由一篇翻译日本学者铃木虎雄所写的论文《五言诗发生时期之疑问》而引起的。当时这篇论文一发表，就受到赞否两论的评价。经过这场论争的结果，得到了以上的定论。本文将一方面详细介绍这段不太为人所知的论争之内容和过程，另一方面同时对此定论的论点做一番研讨。